

科学技術振興に高い見識

金子岩 三

私が大平先生の醫咳に接するようになったのは、昭和三十三年、衆議院議員初当選と同時に宏池会に所属し、故池田勇人先生からご紹介を受けた時からである。私は長崎県議会議長時代に、当時の大蔵大臣池田先生から長崎県の予算問題でたびたび格別のご配慮をいただいたことに感謝して宏池会に入会したわけだが、それ以来実に二十有余年にわたって大平先生のご教導を賜わったことになる。

特に五十三年十二月、第一次大平内閣の組閣に際して私が科学技術庁長官に任命されてからは、大平総理の科学技術振興に対する高い見識と大きな熱意に啓発されることが非常に多く、総理就任後の「科学技術の史的展開研究グループ」の初会合では、「これからの日本は、独自の科学技術を開発することを通じて人類社会の発展に一層貢献していく必要がある」と強調された。

それにつけても、想い出されることがいくつもある。第一は、科学技術庁が長年にわたって予算要求を続け、その開催を熱望していた国際科学技術博覧会のことである。

この博覧会は、二十一世紀を創造する科学技術のビジョンを内外に示し、特に青少年に未来の科学技術を正しく理解させるため、昭和六十年に筑波研究学園都市での開催を計画したのだが、財政再建を理由に大蔵省は強い難色を示していた。私は財政再建も重要だが、とかくせちがらい世相のなかで青少年に夢をもたせることも政治の要諦と考えて、五十四年十一月の博覧会国際事務局(BIE)への立候補に間に合うよう全力をあげた。

幸い土光経団連会長（当時）を会長とする国際科学技術博覧会推進協議会も設立され、私を後押ししてくれたが、金子一平大蔵大臣が財政難をたてになかなか「ウン」といわない。何回か閣議でのやりとりがあったあと、私は首相官邸にのり込んで大平総理に博覧会開催の意義を力説した。「ウン、それでいいよ。ただ、建設費については財政事情も充分考慮してほしい」。大平総理のこのひとことで開催は決まり、正式に閣議了解された。

もう一つは、五十四年八月に東海・大洗の原子力研究施設を終日視察された時の想い出である。石油に代わる将来の代替エネルギーは、核融合が最も有力というのが私の長官時代に体得した認識だったが、日本原子力研究所の核融合研究施設にご案内した時、大平総理は「ウン、これだな」と強い関心を示された。大平総理に原子力施設を見ていただくだけでも意義があることだったが、核融合を代替エネルギーの中心と見抜かれたのはさすがに慧眼であった。このほか原子力委員会の長年の懸案事項であったカナダ型重水炉（CANDU炉）を輸入するかどうかが政治問題にまで発展した時、総理は国産化を優先し輸入は見送るという原子力委員長の立場を支持してくれた。科学技術行政の推進で、終始私の立場を理解、支持して下さった先生に心から感謝申しあげたい。ただ心のこりは、これからのわが国の政治が、いよいよ大平哲学によって大きく展開されようとして、国民の大きな期待を集めていたやさきに急逝されたことである。

五十四年十月の総選挙以来、戦後かつてみない政局の大混乱のなかで必死に政局の安定を求め、心身ともに全力を尽した大平総理は、五十五年五月の内閣不信任案可決による国会解散・衆参同時選挙の真最中、戦死されたわけだが、この大平総理の尊い死は、選挙の大勝とともに鈴木内閣の誕生と今日の政局の安定をもたらし、わが国保守党の最大の危機を救った。このことは、わが国将来の国運に大きな貢献をしたわけであり、故大平総理の偉大な業績として政治史に銘記され永くたたえらるるであろう。（衆議院議員・第一次大平内閣科学技術庁長官）